Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-28

沖縄集落の日常的実践がもつ社会教育的意味に関する一考察 : 字誌の沖縄戦記録を手がかりに

末本, 誠

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,5(1):39-51

(Issue Date)
2011-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81003437

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003437

神戸大学大学院人間発達環境学研究科　研究紀要第５巻第１号　2011
Bulletin of Graduate School of Human Development and Environment Kobe University, Vol5 No.1 2011.

研究論文

沖縄集落の日常的実践がもつ社会教育的意味に関する一考察
－字誌の沖縄戦記録を手がかりに－

A remark on the meaning of practices in everyday life as a process of adult learning at villages in Okinawa Islands：Through the analysis of life histories, printed in Azashi, on experiences under the Battle at Okinawa.

末　本　　誠＊
Makoto SUEMOTO*

要約：本論文は沖縄の小集落が独自に編集する、「字誌」と呼ばれる印刷物に収録された戦争体験記録を手がかりに、沖縄のシマ社会が有する日常的実践の社会教育的意義を明らかにしようとする。ここでは字誌を、フランスで議論されている「共同のライフヒストリー」と捉えることを通じて、ライフヒストリー研究の観点を分析の過程に導入した。「本土」復帰後に活発化した、住民の沖縄戦での体験を記録しようとする活動の中でも、字誌に収録された記録は独特の特徴をもっている。同じ地域誌ではあっても、字誌は自治体史などとは異なり集落に限定された狭い世界を対象にするため、「何でもあり」という自治体史には見られない戦争体験の記述が可能になっている。本論文ではその体験記録の分析を通じて、戦争体験を記録する場合の観点が多様であること、シマとしての集合体験を記録し住民に世代を超えて知らせようとする意図に基づいていること、「何でもあり」の世界が自治体史には見られないような率直な情動の動きを表現に付与する記録が多いこと、戦場での様々な人生のありようを介した多様で多彩な事実の発見があること、これらの体験を基に語りの過程には自らの人生の意味を探求しようとする意志が作用して、それが住民から見た沖縄戦についての判断を生んでいることなどを明らかにする。

１．はじめに

本論文の目的は、シマと呼ばれる沖縄の小集落における住民の日常的実践がもつ社会教育的意味を、各集落が編集出版する字誌と呼ばれる書物に収録された、沖縄戦の体験記録の検討を基に明らかにすることである。

沖縄戦後「本土復帰」に至るまでの沖縄の社会教育は、米軍支配の下できわめて特殊な展開を示してきた。またさらに時代を遡れば、沖縄には「琉球」としての「本土」とは異なる歴史的、文化的基盤が存在する。これらのことは、沖縄の社会教育研究においては国内の一地方として、他の都道府県と同等の扱いをすることはできないことを意味する。本論文の日常的実践という観点は、こうした沖縄の特殊性を重視した社会教育理解の必要に由来する。

沖縄の社会教育に関する最初のまとまった研究成果というべき、小林文人・平良研一編『民衆と社会教育――戦後沖縄社会教育史研究――』(1988) は、「本土」を基軸としたアプローチの可能性と限界を端的に示すものであった[1)]。この書物の基本的な関心は、教育基本法と社会教育法という法的基盤に立った、「本土」で成立したいわゆる社会教育法体制の沖縄における成立、展開の過程を確認することにあった。その結果、歴史－制度的な観点から沖縄の社会教育の現状と課題を明らかにすることにはなったが、「本土」の一部としての沖縄という、ある種の「同化」の視点を含んでいたことは否めない。

一方で沖縄の社会教育は、「本土」復帰前の公民館制度に見られるように、集落での住民の日常生活と深く結びついた独特の展開を示してきた[2)]。復帰前の沖縄では自治体財政の脆弱さから、自治体の下位に位置する集落の事務所を利用した、公民館制度の普及が進んだのである。今日こうした制度上の不正常さは解消されているが、集落における住民の日常的実践を社会教育という観点からどのように考えるかという課題が、残されている。具体的には、字公民館を拠点として展開するシマの自治的な地域活動や神行事、祭りなどのような、住民の活動がもつ社会教育的意味をどのように考えるのかという課題が残されている。これらは沖縄独

＊　神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

(2011年４月15日　受付
2011年４月16日　受理)

特の社会教育の存在形態であり、究明すべき重要な研究テーマである。それはいわば「沖縄学としての社会教育」への接近でもある。

本研究はシマの日常的実践に目を向け社会教育の「制度」に包摂しきれない、沖縄の社会教育独自の意味を見出そうとする試みの一部である。本論文では、字誌づくりを日常的実践の具体例として取上げ、その中に収録された住民の戦争体験を検討する。

2．課題と方法

1-1　字誌の概観

字誌は、沖縄で自治体のさらに下位に位置する字ないしは区が独自に編集、刊行する地域誌を指す。分厚いものは1000頁を超えるものもある。沖縄の中北部を中心に展開してきた字誌づくりの動きは、現在沖縄本島全体および先島にも広がりつつある。中村誠司によると、種々の記念誌類を含めた広義の「字誌等」の数は、2000年現在で500点を超えるという[3)]。発行元のほとんどは、集落の公民館（区事務所）である。

この活動が社会教育の観点から注目されるのは、企画から資料の収集、刊行に至る過程のすべてが、素人と呼ぶべき一般住民の手によるからである。字誌を含む地域史は、当該地域の住民の地域的なアイデンティティ形成の方法として、従来から社会教育の世界で重視されてきた。「本土」の公民館の中には、地域史講座や地元に残る歴史的一次資料を読み解くための古文書講座を開き、住民自らが釈文を書くまでに育つような地域も存在する。これに対し字誌の特徴は、集落という小地域の住民が独自の力で編集、出版に取り組む点にある。類似の活動は、滋賀県旧愛知川町（現愛荘町）や兵庫県旧香寺町（現姫路市）など「本土」にも存在するが、数は限定される。また本論文で取上げる戦争体験の位置づけの大きさにおいて、沖縄の字誌は際立った特徴をもっている。字誌づくりは、沖縄独特の取組みということができるのである。

字誌に収録されている内容は、「概況」「公民館と字行政」「教育・文化」「生業」「門中」「年中行事」「芸能」「風俗・習慣」「人生儀礼」「移民・出稼ぎ」などである。字誌ごとに若干の相違と工夫が見受けられ、これ以外の項目や欠けるものがあるが、大方は類似の傾向をもっている。

また編集活動の過程は、名護市教育委員会の『字誌づくり入門』が示すように、基本的には一般の市町村史の編集あるいは一般の本の編集と同様の手続きを踏んでいる[4)]。違うのは出版計画を立てて実行するのが「区」という自治的な住民組織であり、その編集と執筆に当たるのが一般の住民であるという点である。

字誌づくりの集落の地理や歴史、行政などに関する項目は一般の関連書物や歴史書、市町村史の関連部分とくに新聞記事の集成資料などが利用される。しかし小地名や方言、神事、通過儀礼、移民、出稼ぎ、戦争体験などの項目は、古老や経験者へのインタビュー調査が行われ、聞取りに基づいて記述されることが多い。この点は社会教育の観点から、とくに注目されるところである。

字誌づくりがもつ社会教育的意義については、この活動をいわば黒子として支えてきた中村誠司と島袋正敏による指摘があり、それぞれ「個人の生涯学習と生きがいづくり」（中村）、「個人が内側から肥えて活性化していく」（島袋）という指摘をしている。しかしそれらは直感的な指摘に留まっており、さらに、どのように研究的な言辞として説明できるのかが課題になっている[5)]。

1-2　日常的実践

次に本論文が字誌づくりのような、いわばシマの日常的な生活を社会教育として捉えるにあたっての、方法論的な観点である「日常的実践」について説明する。ここではこの概念を筆者なりに、他から与えられた環境として個人に作用しその生活を規定する社会化された秩序の下で、個人の日常的な判断や行動が有する創造性と規定しておく。

従来、「実践」は生産や芸術活動など創造的な意味をもつ事柄に対して用いられ、「日常」ないし「生活」は、創造的要素を欠いた単なる繰り返しの世界と考えられてきた。しかし近年、社会構成主義やエスノメソドロジーなどの議論の中で、改めて日常的生活がもつ社会的意味に関心が集まり実践性が論議されている[6)]。

ミッシェル・ド・セルトーは、権力や制度を介し「社会政治的な秩序」として編成された人々の生活の中に、「読むこと、話すこと、歩くこと、住むこと、料理すること…」に関わった「もののやりかた（l'art de faire）」という、創造の世界を見出した[7)]。セルトーは両者を、「戦略（stratégies）」と「戦術（tactiques）」という対比で捉え、区別している。

また田辺繁治は人類学の立場から、規則や規範に従って生み出されると考えられてきた「ルーティン化された慣習的行為」が不変のものではなく、「その反復は変動と差異をともないながら実践を生みだす」ものと捉える必要を示唆する概念として、この概念を位置づけている[8)]。

教育における議論としては、レイブとウェンガーによる「正当的周辺参加」論を例に挙げることができる。『状況に埋め込まれた学習』という本のタイトルが示す通り、この議論は徒弟制のように新参者が先達とともに実践の場と時間を共有する過程で、自然に技や知識を身につけるという事実がもつ教育的意味を問い直そうとした。この理論の教育論としての特徴は、従来の「知の伝達」を旨とする学校型の教育観に対する批判およびそれと異なる教育観の探求を目指している点にある。この点でこの議論は、イリッチやフレイレ等を嚆矢とする一群の新しい教育的関心の流れに属している。

いうまでもなく教育は、一つの創造の過程である。従来の教育の科学は、この創造の過程は客観的な知の伝達を媒介させることによって、社会発展や社会正義の実現に結びくつくと考えてきた。それが誤りとは言わないが、激しい社会変化の中でこの公理が見直されるようになっている。シマの日常的な生活実践がもつ社会教育的な意味の探求というここでの試みは、大きくはこのような今日的な課題に応えようとするものである。

なお柳田国男および民俗学的な「ハレ」と「ケ」という区分によれば、神事や祭りは前者に属するというべきであり「ケ」たる日常とは区別される。しかしここでは上記の通り、権力や制度を介してシステムとして作用する社会秩序との関係を問題にするため、これらも日常的実践の中に入れて考える。

1-3 「共同のライフヒストリー」

本論文は文献調査に基づいた質的研究である。具体的な方法論としては、字誌を「共同のライフヒストリー」の一部と捉えることによって、これ以降の戦争体験記録の分析においてライフヒストリー的な観点を導入する。

一般に、エスノメソドロジーやグラウンディッド・セオリー、ライフヒストリーのような質的な研究方法は、科学主義的な量的研究に限界を見出し、対象がもつ複雑性に着目しようとする新たな課題意識と結びついている[9)]。とりわけエスノメソドロジーは、研究対象とする諸現象の中に、判然とはしないが何らかの問題の存在が確認される場合、しかも量的な調査による科学的アプローチの成果に疑問がある場合に、研究者自身が対象の中に入り込みそこでの「メンバーシップ」を得ることを通じて、その意味世界を対象の内側から記述し一つの解釈として提示する方法である[10)]。ライフヒストリーというナラティヴな方法論は、その場合の具体的な接近方法を提供する[11)]。

ここでの研究対象である字誌づくりは、活動の基盤となるシマ社会の様々な生活的諸実践と密接に結びついており、まさに複雑な現象といわなければならない。字誌づくりがもつ社会教育的意味という、外からの観察では知りえない事柄を探求するにはエスノメソドロジーのような、対象の内側に入り込む視点が求められるのである。

他方の「共同のライフヒストリー」は、フランスのクーロンとルグランによって提起された新しいライフヒストリーに関する研究枠組みである。ルグランが示した「共同のライフヒストリー」の一覧表には、「都市の地区」「仕事仲間」「企業」「工場」「政治的な集団」「結社」などと並んで、「村落共同体」とその成果物としての「パンフレット」が挙げられている[12)]。事実フランスにも、ナント市郊外のグランリュー湖に面した漁業集落に関する『パッセー誌』[13)] やオルレアン市スルス区の『スルス誌』、その他が存在する[14)]。ちなみにルグランは、単なる集団や組織の歴史と違う、個人ないしは人間の存在を起点として見出される集団的な意味の発見に、個人を単位とする通常のライフヒストリーとは異なる「共同のライフヒストリー」のもつ意味を見出している[15)]。本論文で重視するのは、字誌をライフヒストリーの一つのバリエーションとして捉えることによって、そこに個人および人間を起点として見出される「集合的な意味」を見出すことである。

ライフヒストリーないしはライフストーリーは、近年、社会学や人類学、心理学などを中心に関心が集まるエスノメソドロジーないしはアクションリサーチ的な、研究・実践の方法論である[16)]。いずれの立場であれこの方法に取り組む過程には、語り手が過去の経験を語ることを通じて自らの人生を振り返り、自己の意味を発見したり再構築したりするという変化が伴っていることが知られている。日本での対応は遅れているものの、成人教育の立場からはこれを成人の学習の一部と捉え、実践・研究的な方法としての応用する取組みが進んでいる。

西洋の場合、伝記および自伝はもともとイエスやアウグスチヌスなど偉人や権力者に限られていたものが、18世紀に至りルソーの『告白』によって市民のものになった。19世紀にはスタンダールやジョルジュ・サンドら文学者による自伝が現れ、さらに資本主義の発展に伴ってブルジョワジーの伝記が数多く書かれるようになった[17)]。こうした歴史を踏まえて、エリートのものに限定されていた自伝を民衆が書くことの意味を、ガストン・ピノーは「自己構築の民主化」と呼んでいる[18)]。

こうしたライフヒストリーという方法論を、字誌の戦争体験記録の解釈に応用する観点を明確にするために、「ライフヒストリーかライフストーリーか」という用語の問題について触れておきたい。いまだはっきりとした区別が確立されているとはいえないが、山田ようこは、マンの「ライフヒストリーが人生の歴史的真実をあらわそうとしているのに対して、ライフストーリーは、生きられた人生の経験的真実を表そうとしている」という説をもとに、両者の厳密な区別を主張している[19)]。この区別は前者の歴史性（historicité）と、後者の物語性（narrativité）の相違点を強調する見方である。しかし成人教育においては、この両方が必要である。この点についてアレックス・レネは、「主体による、その過ぎた人生についての現表（énonciation）」という「ライフヒストリー（histoire de vie）」の簡単な定義を採用しながら、「ライフヒストリー＝ライフストーリー（récit de vie）＋関係づけられた事実の分析」という図式を示している[20)]。これによれば、ライフストーリーはライフヒストリーとして意味づけられた人生の断片、および素材を意味する。ここではレネの区分に従う。要するに、成人教育の方法としてのライフヒストリーは、「語り」という行為に付随する振り返りの過程を介して自己の人生の意味づける、学びの一形態と理解されるのである。

一方、坂部恵は「はなし」と「かたり」を区別して「〈はなし〉のほうが、より素朴、直接的であり（…）、〈かたり〉のほうは、より統合、反省、屈折の度合いが高く、また、日常生活の行為の場面からの隔絶、遮断の度合いが高い」と述べている[21)]。次に見るように、従来の沖縄戦の体験記録に関する注目は、主に証言としての意味に集中してきている。しかしそこに、このような「語り」の観点を加えれば、証言の背景にある語り手の考えや語る理由、期待、判断などの要素の存在に注目することが可能になる。「語り」という行為は他者に対して語りかけようとする情動の動きによって媒介されるのであり、「記録」という行為も単純に事実のみが問題となるのではなく、何故その事実を語り記録として残そうとするのかという意味付与の過程を伴っている。より具体的な検討の過程を言えば、本稿では綴られた体験記録の中に、意味の「向き」と「強さ」を見出そうとする。本来「語る」という行為は、過去に経験した2つ以上の事実を結び付けようとする行為である。この結び付けの過程は必然的に意味の流れを構成し、そこにこれら二つの要素が浮き出てくるはずなのである。

1-5 字誌の意味世界

こうした観点から筆者は字誌の編集者が、字誌づくりの過程で何を考え発見したのかに焦点をおいた、半構成的な聞き取り調査に基づく質的研究を行い、すでにその結果を公表している[22)]。そこで論じた字誌づくりの意味世界に関わる内容の概略は次の通りである。

①集落が字誌づくりを決定する背景には、シマをめぐる地域変化が存在する。

②その地域変化に対して、シマ内の住民及びシマを出た元住民が危機意識をもっている。
③目的と動機は、言語による表現としては必ずしも明確には意識されていないが、シマに関わる事実を「何でもあり」の立場で記録することを通じて、先輩達がつくってきた努力を引き継ごうとする意識が存在する。
④こうした関心のもち様は、他ならぬ当該のシマにすむという、シマに対する愛着や住むべき土地の選択、判断と結び付いている。
⑤編集の過程には公共の地域誌としての字誌の性格から、「あやふやなことは書かない」という配慮をする一方で、「個人」に属する事柄は取り上げないような独特の配慮がある。
⑥成果としては、全体に特別の影響はないという解釈が多い中で、限定的ながら地域の改善や伝統芸能の復活などの新たな展開がみられる。
⑦シマの範囲は集落の存在する地域に限定されず、シマを離れて都会で居住しながら郷友会をつくって活動する同郷者や、国外に移民した家族、さらには死後の世界などにも広がっている。
⑧最後に、字誌は主に男性の仕事になっており、女性の位置からみた場合には違った意味世界が成立する可能性がある。

以上の検討から本論文に引き継ぐべく残されるのは、総じて字誌にはいかなる社会的な意味があるのかを明らかにする課題である。この点を確認するために、筆者とともに現地調査を行ったラニ＝ベルの提起する、字誌の社会的なダイナミズムに関する疑問に目を向けてみる。ラニは、字誌（共同のライフヒストリー）がいわゆる「素人」による「知」の創造であることと、「語る」ことの背景にある「経験したことを次の世代に伝えたい欲求」が、「強制される忘却に対する**抵抗の行為**」（ゴチックによる強調は本文）であることを確認した上で[23]、次のように指摘している[24]。

> つまり彼らは何かを探求しようとしていたのだ。しかし自分達が発見したことや彼らにとってそれがなんであるかということには、まったく無頓着なのだ。彼らの目的は何よりも、みんなのために一冊の本を作り上げることであり、そこには個人と関わりがあるかも知れない事柄や、個人として驚きを感じるような事柄についての探求はいっさい存在しない。すべては集団に帰されてしまっており、いかに彼らが、地域の歴史で無視されてきたことを明らかにしそれを伝えるのだと言ったとしても、彼らはすでに分かっていたことしか受け入れようとはせず、それ以外に新たな事を発見しようとすることもなければ期待もしていないように思えるのだ。（…）話を戻せば、個は完全に共同の関わり合いの中に置かれており、個人として自分の考え方を持ち、自分の感情を持つことは不可能なのだ。

筆者はこの指摘のすべてを肯定するわけではないが、理解可能な点は多い。とくに語りの過程で発見される意味の世界と語り手や他の住民がどのように向き合うのか、また、そのことによってどのような新たな意味が付与されるのかという、創造の過程を究明することは重要な課題である。このほかにも、西洋と東洋における集団と個の関係性の相違にも注意を払う必要があるが、この点についてはすでに別の場所で検討した[25]。この指摘を受けて本論文で確認しようとするのは、字誌づくりには発見や探求、さらには社会性などの要素が本当に存在しないのかどうかという事柄である。というのも、字誌に収録された沖縄戦の体験記録には、字誌が有する社会的なダイナミズムが現れているように思われるからである。

3．沖縄戦とその記録

2-1　沖縄戦の特質と記録

沖縄戦での経験を住民が語ることのもつ社会的なダイナミズムという問題は、広島と長崎における市民の被爆体験の語りと同じ意味をもつだろう。前者では戦場を逃げまどった住民一人一人の証言が「沖縄戦」という歴史を構成し、後者では業火に包まれた一人一人の証言が「原爆史」を構成するのである。しかし証言内容の幅の広さという点では、沖縄戦の記録の方が、はるかに幅が広いように思われる。言うまでもなく、ここでは「広い・狭い」の優劣を問題にするのではないということを断った上でだが、このような特徴が生まれる要因には、被爆体験が文字通りに一瞬の出来事として大勢の市民を同一の悲惨の中に巻き込んだ出来事であったのに対して、沖縄戦の場合には戦闘の開始から終結まで3カ月以上の時間が経過し、さらに沖縄本島全体で住民が戦闘に巻き込まれるという出来事であったという違いがあるだろう。

また住民が地上戦に巻き込まれるという沖縄戦の特質が生んだ帰結として、一般住民の被害の大きさという点にも注目する必要がある。嶋津与志は沖縄戦での戦死者はいまだに正確な数はつかめないものの、援護法の対象として認められた一般住民の戦死者、その対象とならない住民の戦死者、沖縄出身軍人軍属の戦死者に終戦後にマラリヤや餓死をした者を含めて、その数を15万人と推定している[26]。1943年における沖縄全体の人口60万人の、実に４分の１に当たる数字である。一般住民の戦死者の多くは、武器を持たない老人や女性、子どもであった。

沖縄戦で日本軍が採った作戦の要は、日本「本土」での決戦を準備するための「時間かせぎ」をすることを目的とした持久戦であった。上陸して来る敵を波打ち際で阻止せず、いわば自陣内に引き込んだ上で攻撃することによって、多くの犠牲を強いつつ時間を稼ごうとするものであったために、沖縄本土全体が戦場になり住民が巻き込まれることになった。また、米軍が読谷海岸に上陸し本島を南北に分断した後、北部を逸早く支配下におきながら南下する作戦をとったため、住民は首里の陥落によって戦線が南下するに伴い、守備軍とともに糸満の喜屋武岬方面に追い込まれる形になった。さらに、指揮官が戦闘継続を指示したまま自決し守備軍の組織的な抵抗が止まった後も戦闘が続いたため、南部一帯は軍人と民間人が行き場を失って逃げまどう修羅場と化したことも、住民の被害を大きくする要因のひとつとなった。北部でも家を焼かれ山に逃げ込んだ住民から、飢えやマラリヤなどによる犠牲者が出た。このような住民の戦死者の中には、日本軍によって集団自決に追い込まれ自ら親兄弟を撲殺した者や、迫り来る米軍から身を隠すためとして兵士に強いられわが子を縊死させた母

親など、文字通りに悲惨な事例が含まれることは周知の通りである。

住民がこうした沖縄戦の特異な体験を忘れず、さまざまな方法で記録しようとするのは、当然のことというべきである。『沖縄戦を考える』の中に「沖縄戦はどう書かれたか」という章を設けた嶋津与志は、本名の大城将保の名によって初出論文が書かれた1973年の時点で、125冊の戦史・戦記類を数え上げており、その数はこの本が出版された1983年の段階で220～230冊に増えたと述べている[27]。また最近の沖縄戦に関する大きな研究業績である林博史『沖縄戦と民衆』の末尾に示された参考文献を見ると、日本国内で刊行された沖縄戦関連の単行本と自治体史（報告書類を省く）に限っても、厳密ではないもののその数は350点を超える[28]。この数は少ないとは言えないだろう。

しかしながら、このように沖縄戦を記録するという活動の展開過程は、必ずしも単調なものではなかった。問題を複雑にする要因は、一言でいえば、そもそも沖縄戦を記録するとはどのような意味をもつのかという、評価や判断の問題に行き着く。戦争体験を記録するということは、何をどう書き、語るのかという問題と関わっているのである。この点はまずは出版される書物の種類や、書き手の多様さに現れる。前者の書物の種類に関して嶋は、次の５つの類型を挙げている[29]。

第一類型　戦闘経過中心の戦史、戦記。
第二類型　沖縄現地の総合的体験記録集。
第三類型　個人および団体の手記、記録。
第四類型　日米両軍の公刊戦記。
第五類型　日米両軍及び沖縄住民の総合的戦史。

また後者に関しては、1973年の段階での刊本125冊の戦史、戦記類（市町村史等は省く）を、書き手の類別を基に下記のように区分している[30]。

①旧軍人による戦闘記録　25冊
②ジャーナリスト、作家による実録　49冊
③沖縄住民の手記・証言記録　18冊
④公式記録　28冊
⑤その他　５冊

このような区分法の工夫は、沖縄戦の記録がもつ意味をどのように理解するかに関わる、粘り強い試行錯誤を示す。興味深いのは嶋が、10年間を挟んでこのように区分を変化させるべく現れた新しい要因が、1970年代の沖縄返還協定に関わる県民運動と沖縄戦に関する近代史研究の成果、とりわけ「住民資料の集積」であるとしている点である[31]。言うまでもなく、それは字誌の戦争記録をその一部として展開する流れである。そこで次に、沖縄戦の記録づくりにおける字誌の位置づけを、簡単な時期区分を基に示してみたい。

2-2　字誌の戦争記録の位置

次に示した沖縄戦に関する主要な記録の年表を基に、ここでは次のような戦争体験記録に関する時期区分を考えてみたい。

①生成期　1945～1971
②発展期　1971～1992
③展開期　1992～現在

表１　縄戦記録関連年表

発行年	書　名	社会的背景
1945		沖縄戦・敗戦
1947	古川成美『沖縄の最後』	
1950	沖縄タイムス社編『沖縄戦記・鉄の暴風』	
1951	中宗根政善『沖縄の悲劇』	
1953	大田昌秀・外間守善『沖縄健児隊』	
1960	陸上自衛隊幹部学校『沖縄作戦』	
1968	防衛庁戦史室『沖縄方面陸軍作戦』	
1970	大江健三郎『沖縄ノート』	
1971	沖縄県『沖縄県史9,10』	
〃	名嘉正八郎・谷川健一編『沖縄の証言』	
1972	八原博道『沖縄決戦―高級参謀の手記』	沖縄返還協定
1973	曽野綾子『ある神話の背景』	
1974	読谷村字座区『残波の里』	
〃	『那覇市史・戦時体験』	
1978	石原昌家『虐殺の島』	
〃	那覇市『忘れられぬ体験』	
1979	大田昌秀『これが沖縄戦だ』	
1981	『名護市史・戦争体験』	
1982	大田昌秀『総史沖縄戦』	
1983	平和祈念資料館『平和への証言』	
〃	沖縄戦フィルム1フィート運動の会設立	
1984	『浦添市史・戦争体験記録』	第三次家永教科書裁判
1985	名護市『語り継ぐ戦争』	
1988	読谷村『平和の炎１』	沖縄出張法廷
1992	読谷村楚辺区『楚辺誌・戦争編』	
〃	糸満市米須区『米須誌』	
〃	『読谷村史・戦時記録』	
1995	金城重明『「集団自決」を心に刻んで』	
1997	琉球弧を記録する会『島クトゥバで語る戦世』	
2003	北谷町上勢頭区『上勢頭誌』	
2007	読谷村高志保区『高志保誌』	岩波「集団自決訴訟」

①　生成期とした1945年から1971年に至る時期は、敗戦から『沖縄県史』の戦争記録集９巻と10巻が発刊されるまでである。この時期には沖縄戦の終結と日本の敗戦を経て、沖縄で沖縄タイムス社編『沖縄戦記・鉄の暴風（以下『鉄の暴風』と表記する）』（1950）が出版され、続いて仲宗根政善『沖縄の悲劇』（1951）や大田昌秀・外間守善『沖縄健児隊』（1953）など、戦争に巻き込まれた学生の犠牲を取り上げた書物が刊行される。他方では、防衛庁防衛研修所（現防衛研究所）による『沖縄方面陸軍作戦』（1968）などのような、国家の立場からの沖縄戦史が現れる。この時期の戦争記録の多くが、いわゆる「ひめゆり部隊」の伝説に見られるような学生の「悲劇」に関心が集中する中で、『鉄の暴風』は伝聞資料を用いたものではあったが、一般住民の戦争体験を記録していた。

②　次の発展期は、1971年の『沖縄県史９、10』の発刊から1992

年の『楚辺誌・戦争編』の刊行までである。住民の戦争体験記録を編集した同県史は、『鉄の暴風』の観点をさらに深め広げようとした書物であった。同年にはその趣旨を広げる目的から、同じ資料を基にした中央公論新書『沖縄の証言』が発刊されている。このような動きは沖縄県の平和記念資料館が、展示替えにともなって「証言の部屋」を設け、見学者が住民の戦争体験記録に接する場を設けたことや、「沖縄戦フィルム１フィート運動の会」が設立されることも同じ意味を持っている。一方でこの時期はまた、曽野綾子の『ある神話の背景』(1973) のように『鉄の暴風』の不十分さが論議を呼び、改めて「沖縄戦の真実」が戦争記録の重要な課題として、意識される時期であった。石原昌家『虐殺の島』(1978) や大田昌秀『これが沖縄戦だ』(1979)、『総史沖縄戦』(1982) などの著作は、この点を意識した専門家による成果である。しかしこの時期でさらに注目されるのは、『那覇市史・戦時体験』(1974) や『名護市史・戦争体験』(1981)、『浦添市史・戦争体験記録』(1984) などのように、市町村市の一部に戦争体験を収録する動きが広がっていくことである。これは『沖縄県史』の戦争体験記録集づくりの意図が、関係者の活動を通じて県から市町村段階に下り、さらに広がった事実を示している。またこの動きは那覇市民による『忘れられぬ体験』(1978) のように、市民自らがその担い手になって経験を記録しようとする動きになって広がったことも、注目されるところである。ここでさらに注目しておきたいのは、読谷村宇座区の『残波の里』(1974) のように、住民の戦争体験を重視した字誌が現れていることである。

③　最後の展開期は、1992年の『楚辺誌・戦争編』の発刊から今日に至るまでである。この時期の特徴は、『楚辺誌・戦争編』と同じ年に糸満市の『米須誌』が発刊されたのに引き続いて、北谷町上勢頭区『上勢頭誌』(2003) や読谷村高志保区『高志保誌』(2007) などのような、極めて充実した戦争体験の記述や体験記録集をもつ字誌が生まれてきていることである。これは発展期に県段階から市町村段階へと下がった、『鉄の暴風』以来の住民の目から見た「沖縄戦の真実」を記録しようとする動きが、さらに字のレベルまで下ってきたことを示す。この拡大の過程には、『米須誌』に沖縄国際大学の石原昌家ゼミナールが関わりをもったり、民衆の目から見た「沖縄戦の真実」の探求に『島クトゥバで語る戦世』(1997) のような、方言を用いた語りを映像で残そうとする新しい取組みが生まれていたりしていることも、「発展」の要素として注目されるところである。

以上のように沖縄戦の体験記録づくり中では、字誌が占める位置が拡大するという動きが見られる。前節でみたような特質をもつ字誌づくりの世界が、すべて『楚辺誌』や『上勢頭誌』、『高志保誌』のような先進的事例の方向に動くとは考え難いのは事実だが、こうした動き自体は今後も拡大することが予測される。こうした戦争体験の記録づくりの取組みは、年表に示したような社会的な動き、とりわけ沖縄返還協定や教科書裁判、最近の大江健三郎『沖縄ノート』の「集団自決」に関する記述をめぐる岩波書店と大江訴訟などのような、「沖縄戦の真実」に関わる問題と密接にかかわって展開している。このように、字誌の戦争体験に関する記述は沖縄戦記録をめぐる社会的なダイナミズムと、深く結び付いているのである。次に、この点の検討をさらに進めたい。

2-3　字誌の戦争体験記録の社会的ダイナミズム

いま指摘したように、字誌は戦争体験の記録を通して沖縄社会の変化と、密接につながっている。それでは字誌の社会的ダイナミズムとは何だろうか。ここでは沖縄戦の戦争体験記録づくりに見られる、次の二つの視点の存在に改めて注目してみたい。

一つは沖縄戦を記録することの意味を、「沖縄戦の真実は何か」という問題として問い質そうとする視点である。これは冒頭に指摘したように、民間人を巻き込んで展開した沖縄戦の不条理に目を向けながら、庶民ないしは民衆の立場に立ってその意味を問おうという視点である。嶋はこれを「民衆の論理」と呼んで、「軍の論理」から区別している[32]。「論理」とは言っても、このような視点はむしろ論理以前の疑問や不合理感から生じた、きわめて自然な初発の感情や感覚であるように、筆者には思われる。沖縄県教職員組合那覇支部『沖縄戦と平和教育』の「沖縄戦の視点」に示された、「“八文半軍靴"のフィクション」や「戦争観光への疑問」などを見れば分かるように、この観点は住民の戦争体験を軍隊の立場から総括し、その犠牲を美化する言辞に接したときの率直な疑問の上に成り立っている[33]。嶋らのグループには、南部の戦跡を走る観光バスの女性ガイドが、「熱を込めて語る沖縄戦の悲劇は(…)、全くのフィクションではないにしても、誇張と美化によって戦争の実相をおおいかくしてしまうような話があまりに多い」と感じられたのである。武器をもたない老人や子ども、女性の犠牲を、天皇に殉じた名誉ある戦死と捉えることへの違和感と疑問が、この視点の基本にはある。「民衆の論理」とは、住民の犠牲を国家や天皇への忠誠としてからめ取ろうとする国家の意志と、自らが体験した戦争への理解の異同を意識しようとする自覚的な作業を指すと言っていいだろう。したがって「論理」は、何らかの既存の考えや理念を指すのではない。強いて言えば、それは経験の意味を探求しようとする、「論理化」の過程を指すだろう。字誌の戦争体験記録がもつ社会的ダイナミズムは、このような論理化の過程として成立するはずである。

というのは、この観点に立つ戦争記録への関心は、基本的に沖縄戦の中では「何が起きたのか」を「戦争の真実」として、民衆の立場から明らかにすることを重視する。語られてこなかった事実や隠されていた事実を明らかにし、広く社会に伝えることがこの活動の重要な意味をなすのである。このような問題意識は今日に至るまで、基地の存在をめぐって展開する沖縄の社会運動を支える社会的ダイナミズムの一部を構成している。字誌は戦争体験の記録を通して、このダイナミズムにつながっているのである。

もう一つは沖縄戦の体験が語られるようになるまでに、35年という時間がかかったという事実がもつ、上記とは逆の向きをもつ視点である。この点で興味深いのは、屋嘉比收が「一般的に沖縄戦の体験が公に語られるようになるのは沖縄戦から33回忌が過ぎた、1978年以降のことだ」と指摘していることである[34]。33回忌という死者の弔いの区切りが、人々が経験を語る糸口になるというこの指摘は、経験を「語る」こと自体がもつ困難さに目を向けようとしている。

この困難さについて写真家の比嘉豊光は、屋嘉比のこの文章が収録された『島クトゥバで語る戦世』という自らの写真集の中で、インタビューに答えて次のように述べている[35]。

戦争体験はふだんは語られないことで、日常的に子供たちに聴かせるようなものではない。しかし、改めて島クトゥバで記憶を呼び起こして話し始めると、そのときの感情や風景まで表情に出てくるのが一番感動的である。

いくつかの事実を補足しておくと、比嘉は村山友江とともに、『楚辺誌・戦争編』の編集にかかわった経験をもつ。二人はこの経験を基に、すでに高齢者となった沖縄戦の経験者が方言（島クトゥバ）によって、その体験を語る姿を映像として記録したのである。比嘉の発言は『楚辺誌・戦争編』の編集過程で、方言で調査した「語り」を共通語に置き換えたときに感じた、「ギャップ」の意味を説明している。比嘉のこの発言は、先の屋嘉比の指摘と直接に関わりをもって語られた言辞ではないが、「33回忌」を一句切りとする理解を共有していると考えられる。つまり別の表現をすれば、戦争体験を語るという行為は、語りえないという困難を超えて、「ある瞬間」に現出する（emerge）ものなのである。「33回忌」という句切りは、そうした現出のきっかけとして納得のいくものである。また比嘉等が感じた「ギャップ」も、本来は語り得ないものが語られる瞬間に出会った驚きを意味するものと理解される。言い換えれば、「語る」という行為は「沈黙」と背中合わせなのである。戦争体験を記録するという行為は、沈黙が語りに転じる一つの変化のプロセスを意味する。比嘉が経験した「その時の感情や風景まで表情に出てくる」という発見は、まさに映像がその瞬間をとらえた事実を指している。

岡真理は、スピルバーグ監督の「プライベート・ライアン」（1998）というリアルな戦闘場面の描写で評判を呼んだ映画作品を取り上げて、手足が吹き飛び内臓が飛び出す場面をどれだけ本物らしく描いたところで、現実にあった出来事の真実に近づくことはできないとして、実際にあった経験を語ることの困難について次のように述べている[36]。

言葉では語りえないはずのその＜出来事＞について語ろうとする私たちが、『語りうる者』として振舞おうとしたら、その瞬間に私たちは〈出来事〉を裏切ることになるだろう。

この指摘はまさに、沖縄戦についてもあてはまる。スピルバーグが製作総指揮をして作られたテレビドラマ「The Pacific」の沖縄戦編は、戦争の悲惨さを被弾して飛び散る肉体や腐敗してウジが湧いた死体として再現しようとするが、それがリアルであろうとすればするほど、映し出される場面は「出来事を裏切る」ものであることが理解される。

しかしこの困難は、戦争を体験した当事者についてもあてはまる。時間を隔てて、過去に経験した出来事を言葉として現在の時間に再現することは、本来は不可能なことである。忘却を含めて過去の経験を現在に再現することは、フィクションを含まざるを得ない。坂部が言うように、「語り」は「騙り」につながっているのである[37]。経験をした当事者の場合には、「出来事」の記憶と「語り」として表現される言説の間の乖離が、語ろうとする行為への抑止として作用するであろうことは、想像に難くない。経験した出来事が過酷なものであればあるほど、抑止する力は増す。

このように考えると、「語る」という行為はこの抑止の力に抗して出現してくるものであることが分かる。このような「沈黙」から「語り」への転換ないしは「語り」の現出は、戦争体験を記録する行為一般が持つ内面の変化、つまり教育的な意味世界として理解される事柄である。字誌の戦争体験記録が持つ教育的意味とは、こうした内面の再構築の過程を指すのである。

ちなみに二番目のこの視点を欠いた場合、一番目の隠された「沖縄戦の真実」を明らかにするという視点は、戦争体験を語るという行為そのものを疎外し抑圧するものになりかねない。というのは「真実」としての意味の有無が、すなわち経験の意味を判断する基準となり、意味の大小を測る過程を生み出す可能性があるからである。その場合は、沖縄戦での住民の犠牲の過酷さを表す体験だけが重要視されることに陥りかねない。次に見るように、県史や市町村市のような公式の出版物の戦争記録の場合には、沖縄戦の経験を正確に記録し記述するという必要から、このような配慮が加わりやすい。そのような必要を否定するわけではないが、戦争体験として重視されるものがあれば、必然的に重視されない体験が生まれる（取り残される）という逆説の存在を、ここではあえて強調しておきたい。この点ではこれから検討する字誌の戦争体験記録は、県史や市町村市とは区別される独自の、そして体験の記録としては最も重要な要素を含んでいるものと考えられる。

4．戦争体験記録の意味世界

それでは字誌の住民の沖縄戦での体験記録は、実際にはどのような教育的意味をもつのだろうか。次に、字誌の関連部分をライフヒストリーと捉えた意味世界について、いくつか整理しておきたい。

ここで検討の対象とするのは、筆者が収集した55点の字誌に沖縄県立図書館および名護市立図書館で調査した字誌30点を加えた、85点である。これらの中には個人の生活誌や写真集、新聞集成などが含まれるために、85点すべてが戦争経験の記録を含んでいるわけではないが、通常の字誌として印刷出版されたものの場合は、数点を除いてほとんどがこの記録を含んでいる。ただしその扱いは二通りあり、字の歴史一般として戦争の経過が記述されるものと、「手記」として個人の戦争体験記録が収録されるものとがある。本節が検討の対象とするのは、主に後者である。特徴的なのは、字誌が個人の事柄は記述しないという原則をもつにもかかわらず、戦争体験に関しては「手記」として扱われ、個人名による私的な内容の記述が許されているということである。本論文で扱うのは、このような字誌に収録された個人の内的世界を介して捉えられた、沖縄戦の集合的な意味の世界である。

なお字誌の戦争体験記録の内容の検討に入る前に補足をしておくと、沖縄戦の開始以前からシマの住民は戦争ないしは日本軍との接点を数多く有していた。『邊野古誌』は住民と戦争との接点を、次のようにまとめている[38]。

○徴用と供出――桟橋構築・ざん壕構築・伐採挺身隊・青少年団・供出・警防団と国防婦人会

○避難生活――防空壕構築と避難小屋・疎開民受け入れ・字の避難（食料・避難生活・避難住民の下山と捕虜状況）

○駐留基地と捕虜収容所――大浦崎収容所・大浦崎駐屯基地と住民・大浦崎収容所哀歌
○戦争と住民――十十空襲と住民・戦中の主な出来事
○徴兵と出生軍人――兵隊見送り（壮行儀礼）・戦没者と戦争犠牲者・村民葬

北部の一つの集落の事例ではあるが、シマの生活が戦闘の開始以前からさまざまの面で、日本軍との関係を有していたことが分かる。

3-1　体験記述の多様さ

最初に触れておきたいのは、字誌の戦争体験記述の多様さについてである。ここでの多様さとは収録された経験の種類の多様さをいうのではなく、経験の意味づけ方の多様さを指す。前項で字誌は「何でもあり」の世界であるという調査研究の一部を紹介したが、戦争体験の記述においてもこの指摘は当てはまる。

端的な例は、住民の悲惨な戦死の記述の後に続けて防衛庁の『沖縄方面陸軍戦史』の一節を引用する、『我部祖河誌』のような事例だろう。上で、嶋津与志の「軍の論理」vs「民の論理」という区別を紹介したように、同じ体験であってもそこに見出す意味は本来、立場によって異なる。このような例は、記述の中に流れるイッシューを混乱させているといえる。あえて強い言葉を用いるとすれば、このような混乱は自治体史のような公式の体験記録集には見られない、字誌に特有の特徴である。

このような「何でもあり」の世界という特質は、場合によると視野の狭さにつながり地域エゴを強める方向に、作用する可能性がある。例えば『我部祖河誌』や『古我知誌』が、昭和初期の「嵐山事件」というハンセン病関連施設の建設問題に関連した「闘い」を、先人の「偉大な苦労の功績」として高く評価し記録しているのは、ハンセン病問題への理解を欠いた視野の狭さを露呈させた事例というべきだろう。

しかしながらこのような混乱や狭さを含んだ多様さは、同時に「語り」の豊饒さを意味する。すでに触れたように、字誌の場合には経験を記録することに関する制約は、県史や市町村史に比べて少ない。自治体史では、事実を正確に記録することや幅広く公平な観点を保つことが求められるのに対して、字誌には基本的にその責任はないからである。この特質は、上で述べた「沖縄戦の真実」を記録するという語りの観点が陥りかねない、体験を評価し語りに軽重をつけるというと陥穽から、字誌が自由であることを意味する。具体的にいえば、市町村史では編集の過程で経験談や手記の選別という形での編集者の介入が不可避であるのに対して、字誌の場合にはその過程が全く無いかあっても限られる。これには収集する体験記録の数に、限りがあるという事情も加味して考えなければならないだろう。

要するに字誌の戦争体験記録の豊饒さとは、より正確には夾雑物が多いということなのである。夾雑物というのは戦争に直接関係のある事柄やその悲惨さを伝える経験だけが選ばれるのでなく、村から派遣されて受けた講習会で褒められた、個人のささやかな喜びを綴った手記なども記録として残されることを指す。また夾雑物の中には稚拙さや回りくどさといった表現の的確性の欠如、つまり言葉が記録すべき事実にたどり着くまでに迂回する距離の大きさという要素も含んでいる。この部分は住民の「語り」ないしはライフヒストリーとして、筆者が字誌の戦争体験記録に注目する際の焦点である。

この点で「ひめゆり平和祈念資料館」の仲田晃子が、比嘉豊光の写真集『わった～島クトゥバで語る戦世』に収録された文章の中で述べている、次の指摘はきわめて示唆的である。仲田は資料館のスタッフとして「資料館で沖縄戦のことが語られるときはどうしても、事実関係がどうか、記憶違いではないか、確実に言えることはどこまでかなど、“まちがい”がないよう注意がはらわれる」のに対して、「『元ひめゆり』学徒」としての語りには含めることのできない、私的な語り」、「資料館で伝えることには“使えない”語りを聴くことがある」として、次のように述べている[39]。

> それは、年表のどこかにおさめることができるようなものではなく、広くみんなに知ってほしいという性質のものでもなかったりする。聞いたことでこれが分かったとは言えないような語り。しかし、痛みや悲しみ、あたたかさ、さびしさ、喜び、感謝の気持ちや申し訳ないという気持ちが語っているその人から伝わってきてその感情にいつの間にか自分も巻き込まれたりする語り。

これは直接に字誌の戦争体験記録について言及したものではないが、ここで問題にしている夾雑物を含む多様性がもつ豊饒さの内実を言い表すものと理解することができる。字誌は仲田の言う、「私的な語り」の場として機能しているのである。

3-2　集合的な体験の記録

二番目は字誌の戦争体験が、シマを単位とした集合的な経験を記録しようとしている点である。シマの集合的経験を記した典型例は、空襲によって家々が焼かれていく様子を目撃した体験記録だろう。状況把握のために夜になってから立ち寄った集落に、その時、誰と誰の家が焼け残っていたのかを記した『轟――すくたし』の記録や、避難先から爆撃によって燃え始めた集落を見下ろしながら、「今はどこの家が…今はどこ…今は何屋だ」と話しあいつつ眺めているしかなかった経験を記録する『富盛誌』のような事例は、シマの被災の様を個人の経験を基に確認し共有する意図を表している。

集合体としてのシマの経験を記録しようとする意図は、戦火が及ぶ中で北部への避難をめぐって住民の行動が分かれた場合に、それぞれの経験を集約してシマの行動として記録しようとする『屋嘉誌』や『比謝矼誌』、シマの住民が「捕虜」として収容された収容所ごとの経験を集約し、その経験の全体像を復元しようとする『米須誌』などのような形で表わされている。こうした集合体としての経験の集約は、北部への疎開を住民が迷った理由（『米須誌』）や犠牲者が多く出た理由（『識名誌』）、さらには犠牲を少なくした防衛団員の功績（『奥のあゆみ』）などの分析、および犠牲者の数の把握、さらには家族、個人名、戦死の理由や場所の記録など、住民を襲った死の詳細の確認に及んでいる（『米須誌』、『識名誌』）。

すでに指摘したように、夾雑物を含んだ多様さの中の豊饒さを特色とする字誌には、戦争の中での様々な「私的な経験」が記録

されている。例えば「天皇陛下万歳」を叫んで死んだオジィの最後を、皆に語り継がれるべきものとして記録する例（『大名誌』）や、自らが志願兵として出征した経験を誇りとし、身近な人々に知ってもらいたいとする記録の例（『大名誌』）、さらには戦争の最中、他の住民からスパイの容疑をかけられた一人の住民の誤解を解くことを目的に書かれた記録の例（『渡慶次誌』）などのようにである。これら「私的な経験」の記録は、同じシマの住民に向けた個人の経験の共有を求めている。

注目すべきなのは、このような集合的な経験の確認や共有から、経験がもつ意味の発見が生まれることである。たとえば『南恩納誌』は、住民の様々な経験をまとめた編集者の言葉として、「戦争体験記を通して、Tさんのようなたくましさや、武器をもたなかった人たちの生きる知恵を見出さなければなりません」と記しているが、この指摘は『南恩納誌』だけに限られるものではない。「たくましさ」や「生きる知恵」などの教訓は、戦場を生き抜いた人々のもろもろの経験が、ないまぜになって生み出され引き継がれていくものなのである。

字誌に、戦争体験に関する章を設ける理由を説明した『残波の里――宇座誌』の、次のような言葉はこうした集合体験のもつ意味を端的に表した事例といえる[40]。

> われわれは、過ぎ去った『戦争体験』を忘れてはならない。戦争の悲惨さは、人間の筆舌では表現できない。戦争は人類の最大の罪悪である。人間が人間を殺し、傷つけ、一切の物を破壊しつくす戦争を、再び起こさせてはならない。そのことは、戦火の中を生き残ったものの責任であり、義務であろう。戦い終わって既に二十年の歳月が流れてしまった。戦争当時の記憶も薄れつつあるが、部落の人々の戦争体験を、今のうちにまとめておくことは貴重なことである。

しかしここでは、このような意味が字誌にとってアプリオリに存在するのではないことに、注意する必要があるだろう。言うまでもなく、戦争が悲惨なものであり人類最大の罪悪であること、またその戦争を再び起こさせてはならないことが生き残った者の責任であり義務であることは、もとより正しい。しかしあえて言えば、この一節は正しい指摘であるがゆえに、字誌づくりの語りの多様性に一定の制約となって作用する可能性をもつ。つまりこの立場が固定化し規範化される場合には、これとずれる言説や体験記録の位置づく余地が失われる可能性が生まれるからである。もとよりここで筆者は、『残波の里』の関係者にそのような意図があると考えているわけではない。一つの可能性として、検討課題に据えるに留まる事柄であることを断わっておきたい。

この点をこれまで論じてきた事柄との関係で言い直せば、『残波の里』が述べている事柄は「たくましさ」や「生きる知恵」といった意味ないしは教訓の、最終的な集約であると考えられるだろう。つまり字誌の意味世界の探求において重要なのは、戦争に反対するという立場や枠組みの部分を重要視することではなく、そうした意識や価値観がシマ社会の中で生起する過程を探求することなのである。

3-3　情動の役割

三番目は、戦争体験を語り記録するという行為が強い情動の動きを伴っており、ときにはそのカタルシスとして作用しているという点である。

先に沖縄戦では一般住民の犠牲者が多かった事実について述べたが、字誌の中にはこの点に注目しシマの出来事として記録する事例がみられる。例えば『上田誌』は、浦添市前田区の一家全滅家庭の数が全201戸の内の59戸に上る事実に触れ、自らの区でも320名中84名（４分の１）が犠牲になった事実を記している。また『大名誌』は、「細かいことは思い出せないこともあるけれど、はっきり情景が目に浮かぶようなこともあり、怖い、つらい、くやしい思い出が今も残っています。絶対に、子や孫には戦争で私が味わった苦しみを味あわせたくはありません」と記している。

ここで注目したいのは住民の戦争体験が、自らの逃避行や目前で経験した身近な人々のさまざまな死の様態をさまざまに記録しているにもかかわらず、あるいはそれが「戦場の非常な人間像」（『瀬底誌』）として総括されるべき事柄であることが分かっていても、それでもなお、『伊差川誌』が記すように、書きつくすことのない事柄であるということである。『伊差川誌』は、次のように記している[41]。

> 人間の断末魔の叫び。子は親を呼び、親は子を呼ぶ。鮮血に染まりのたうちまわり苦悶する者。45年前の沖縄戦の悪夢。思い出せば思い出すほど次々と残酷なことだけで到底書きつくすことは出来ません。

こうした「経験を語ることの困難」という問題についてはすでに指摘した通りだが、ここではその困難を乗り越えて、経験者自身が記録として書き遺そうとしていることに注目したい。こうした困難を乗り越えて、字誌を含め沖縄には戦争の経験を語る活動が多いのはなぜか。それが困難なことであることを知りつつ、なお語ろうとするのか。その理由は単純ではないであろうが、ここではあえてその背景に強い情動が存在することに目を向けてみたい。

たとえば、『瑞慶覧誌』に収録されたシマの慰霊祭に際しての遺族代表の「祭文」には、「（戦死したのが）部落の指導者」や「働き盛りの若者」、そして「東も西も分からない子達であった事を考える時、胸の張り裂ける思いがし、戦争の恨みはいつまでも忘れる事が出来ません」と記されている[42]。慰霊祭の「祭文」という形式のせいもあろうが、この「胸の張り裂ける思い」や「戦争の恨み」という言葉は、内面的な強い情動を表す直截的な表現といえる。先に取り上げた、『残波の里』の戦争体験を語り継ぐことへの責任を自覚する文章に比べ、どちらが先行するかはいうまでもないだろう。繰り返しになるが、引用した『残波の里』の一節はこうした感情を潜り抜けた理性の言葉なのである。事実『残波の里』の場合にも、住民が避難した壕の上に落された爆弾によって壕がつぶされ、大岩の下敷きになった少年が一人取り残されながら、死の間際まで知っている唱歌を歌い続けた様子が話し合いの中で明らかにされている[43]。この場合にも、『瑞慶覧誌』のいう「胸の張り裂ける思い」や「戦争の恨み」が伴っているであろうこ

とは、想像に難くない。

『米須誌』に収録された次の記述は他人の体験談を聞いた編集者の言葉だが、文章としては言葉の使い方などに混乱が見られるものの、そのことによって返って文章の整合性を超えて体験を記録することに向かおうとする、心の動きが生々しく伝わってくる。

> このようなむごたらしい惨事は、想像に絶する。犠牲者の苦しみ、悲しみ、怒りをわめきながら、親子、兄弟、姉妹が、せつない思いを抱き合いながら、湿った暗い自然壕の奥底で、遂に永遠に黙してしまった。このような苦悩の実態は、書きながらでも、手先が震え、文章やことばだけでは的確に表現することは困難な業である。
>
> 誰が、何のために、このような地獄の果てまで、一般住民を押しまくったのか、唯唯思っただけでも、頭が錯乱する。

字誌が有するこうした悲しみや恨みの表出場所としての役割は、今日、心理療法の世界やアフリカの難民キャンプにおける避難民への救済活動などで展開している、ナラティヴな方法によるトラウマのケアと同質の意味をもっているように思われる[44]。また辛い体験の末尾に添えられる平和の大切さや戦争に反対する意思の表明は、悲しみや苦しさ、慙愧、怒りなどのへの救済ないしはカタルシスとしての、意味をもつと言えるのではなかろうか。次の『前川誌』の記録は、カタルシスの結果としての平和への意志の成立過程を、物語っているように思われる[45]。

> 思い出したくない、あの悲惨な戦争、でもなぜか母となった現在、子供たちが大人になった今でも戦場での母がくれた、あの焼き甘藷の美味さは、今の豊かな時代では味わえない母の愛情の贈り物を、子々孫々まで伝えて、わが子が戦場に行くことがない平和な時代が永久に続くように努めなければならないと自分にいいきかせている。そうすることが戦死した父や行方不明となった母と妹への、生きている私のせめてもの恩返しであると信じているものである。

3-4　真実の発見

四番目は、字誌の戦争体験の記録には沢山の「真実の発見」が見られるという事実である。この点は、従来から住民の沖縄戦記録がもつ意味として注目されてきたところであり、それが経験を語ろうとする運動を支え広げる原動力になっていることは、すでに触れたとおりである。最近では、林博史『沖縄戦と民衆』のような字誌を含む膨大な体験記録を基に、戦場での住民の行動の意味を丁寧に解明する成果も現れている。

しかしながらあえて言えば、こうした住民の戦争体験への注目は被害者としての住民に、主な関心があるように思える。繰り返して言うことになるが、筆者にその姿勢を批判する意思はないのだが、こうした傾向が「民衆の論理」を重視する著作やその影響を受けた自治体史に顕著に見られることは事実である。これに対して、字誌の戦争体験記録に見られる「真実の発見」の世界は、すでに指摘した「何でもありの世界」という指摘の通り、自治体史に比べてある種の混乱を含みながら幅広く多様である。

そこで「真実の発見」に関わる、字誌の意味世界を必要な補足をして列記すれば、次の通りである。なおここで筆者のいう「真実の発見」とは、人が成長＝社会化の過程で獲得する「与えられた物語」に対して、自己の経験を振り返りながら発見する「自己の物語」を意味する。したがって、それが「真実」であるかは、ひとまずは問題にしない。

①フィリピンを含む、戦時下における日本兵による住民虐殺（『許田誌』・『屋嘉区誌』・『上田誌』）。
②日本兵による住民への加害。住民が避難した壕からの追い出しや、「日本兵の落ち武者の哀れな姿」、避難する住民の食べ物を奪うなどの「敗残兵の屈辱的な行為」（『米須誌』・『屋嘉区誌』・『辺野古誌』）。
③日本軍兵士の軍人魂のすごさ。日本兵が米兵と戦う戦闘場面を目撃し、その勇敢に戦うさまに対する「頭が下がる」と感じた経験（『大名誌』）。あるいは、撃墜された特攻機を見て、「本当に悲しい思いがして、四、五日は不愉快だった」体験（『楚辺誌・戦争編』）。
④住民による米兵殺害（『湧川誌』）。
⑤日本軍がもつ軍事力への不信。米軍の本島上陸は時間の問題であるとして力なく立ち去る地区司令官を目にしての、「こんな司令官で戦が勝てるかと思った」経験（『大湾誌』）。
⑥負傷者の手当てをする米兵に対するシンパシー。「負傷者の傷の手当てをしている米兵の姿を見て敵ながら感心する」という経験（『大名誌』）。
⑦キャンプで米軍人と仲良しになった沖縄女性への怒り。キャンプで米兵が沖縄戦で拾ったと思われる品物をさも誇らしげにもっているのを目にして、「負けた悔しさで眠れない日もあった」経験や（『楚辺誌・戦争編』）、「捕虜」になり収容所に連れて行かれる車の上から目にした、「米軍人たちと仲良くなった連中もいて、手をつないで歩くものや肩を組んで歩く女性たちを見て怒りを感じた」経験（『大名誌』）。
⑧軍事力の差の発見。「これだけの船団から兵員、武器、物資が陸揚げされたが、日本の兵力との差が一目でわかるような気がした」（『楚辺誌・戦争編』）や米軍の戦車を見たときに「無駄な事をした」と感じた経験、「戦場に次々に新しい兵器が現れる中、多くが既に骨董品的存在であった飛行機で近代戦を戦う兵士の無念さが痛いほど分かる」などの体験（『喜瀬武原誌』・『大名誌』）。
⑨沖縄の政治的位置への疑問。沖縄戦の経験を、「これが沖縄の宿命であるということは、我々はどうしても承服できない」（『楚辺誌・戦争編』）としたり、「わたしは沖縄戦を体験した者として声を大にして訴えたい。まず軍事基地をなくすこと。沖縄戦を決して忘れてはいけないこと。二度と子や孫を戦場に送ってはならないこと」としたりする（『富盛誌』）、意識の形成。

これらの「発見」は事実としては、いずれもすでに自治体史などの戦争体験記録の中で明らかにされてきたものであり、特に新たな事柄が含まれるわけではないだろう。しかしその扱い方とい

う点で言うと、従来から住民の戦争体験記録による「真実の発見」として重視されてきたのは、主に①や②および⑥のような日本軍の非行や住民の被害に関する事実だったのではなかろうか。残る③や④のような日本軍への共感を示す事実や、⑤や⑦のような戦争そのものの意味に関する「発見」は、あまり注目されてこなかったように思われる。

再び繰り返しになるが、住民の被害の大きさという沖縄戦の特質から、①②⑥に関心が集まる理由はよく理解できる。しかし住民の沖縄戦記録の意味を考える場合、それだけに意味を限定せず③④のような戦争協力に当たる要素にも目を向けることが必要だろう。また⑤⑦は、戦火の中で住民が文字通りに国家の押しつける虚偽に気づいた事実として、注目しなければならない事柄である。いずれにしても、字誌に表された住民の「真実の発見」は、矛盾したものであるように思われる。先に示した『残波の里』の戦争体験を記録することがもつ残された者がもつ責任への言及は、こうした矛盾した要素が総合されて生まれる意味ないしは経験に基づいた「知」と理解すべきだろう。

3-5　意味の探求

最後はこうした経験を踏まえて字誌の戦争体験記録の中では、どのようにその意味の探求が行われているのかについてである。

最初に確認しておきたいのは、上で見た「真実の発見」が経験をした者の内面に跳ね返り、何らかの感慨とともに記憶されるという事実である。例えば従軍中、台湾で目撃した撃墜されたアメリカの戦闘機の操縦士への憐憫の情を綴った『大名誌』の記録は、次のように記述している[46]。

> 双胴のＰ38の一機は黒煙を引きながら大きくゆれるように上下したが、赤黒い炎に包まれ山の稜線に消えて行く。その断末魔にも見える様相に敵上空で散る兵士に哀れを感じたが、食うか食われるかの戦場で一瞬とはいえ感傷的になった己の不謹慎さ、甘さを戒めなくてはならなかった。

この体験記録の一節は、過去の経験が一定の振り返りの中で意味づけ直されることを、読む者に理解させてくれる。戦争体験の意味の探求は、こうした意識の作用から自然に生まれるものなのではなかろうか。『大名誌』の同じ手記は、新兵教育の思い出として次のような記述をしている。

> いつ終わるとも知らぬ戦争に死の不安と恐怖はあった。それを乗り越える事が出来たかどうか正直な気持ちとして疑問は残っている。

この言辞の特徴は、筆者が自己の内面に目を向けていることだろう。戦争という事実に向き合う意識は、まずはこのように内に向かう意識として成立する。同様のことは、次の『識名誌』に収録された体験記録の表現からもうかがえる[47]。

> 戦争の悲惨さは人の心を狂わし避難のため移動中も負傷した人や大勢の死体も見て来たが神経が麻ひしていたのか、なにも感じないし怖さもなかった。しかし人は世の中が落ちつき平和になったとき、過去の事象を憂い、悲しみが湧いてくるものである。

「湧いてくるものである」という言葉で締めくくられたこの文章は、いわゆる述懐の表現をとっている。その当時は「何も感じず怖さもなかった」という、矛盾した自己の内面に目を向けて発せられたこの述懐は、内に向かった自己確認の意味をもっている。ここから分かることは、沖縄戦の経験についての総括に当たる判断や誓いの言説はこうした内省の結果として残されるということである。

二番目は、そうした内に向かう意識が次には、「そもそも、沖縄県民にとって学童疎開の『疎開』とはなんだったのだろうか」（『高良の字誌』）や、「多感な青春時代、友人、知人の多くを奪ってしまった戦争は、一体何だったのだろうか」（『屋良誌』）のような、外に向かう意識へと展開するということである。『屋良誌』の次の一文は、その過程には多くの苦痛が伴うことを教えている。

> 戦後、戦争体験を話したがらない人も多いと聞くが、その気持ちは理解できる。誰も、自分の傷口をこじあけて人目にさらすことをよしとはしない。しかし、ここの体験者が傷口を埋めたまま、永遠に口を閉ざしてしまうと、この地で起こった人類の誤ちが無意味なものになってしまう。悲惨な体験を苦しんで悲しんだ人の分まで貴重な教訓として生命を与えなければならない。[48]

また次の『古謝誌』の言説から、このような意識の転換が自己の内側に存在する外的な要素の発見を介して、生じることが分かる[49]。

> 戦前の皇民化教育で洗脳された私たちは、無批判に国に忠誠を誓うことを美とし、あたかもそれが愛国心であるが如く錯覚していたことを、恥じねばならないと私は思います。

ここには、自己の内側に生起した価値が外的な世界の何と切結んでいるかについての自覚的な意識が、恥という責任感覚をともなって構築されている。

最後は、こうした過程を経て字誌には戦争の愚かさを伝え、恒久平和を願う意識が明確に書き記されているという事実である。例えば『米須誌』は、字誌に戦争体験を掲載する理由を次のように述べている[50]。

> いかなる理由でも、人間が人間を殺す戦争を肯定することはできない。生命の中にこそ、あらゆる人間の価値がこもっているからだ。戦争を知らない世代が増えるにつれて、沖縄戦で、住民が味わわされた筆舌に尽くしがたい体験への追認が、年々と、薄れつつあることも否定できない。戦争を二度と繰り返さないために、沖縄戦の決戦場となった、米須字誌に、戦争への道と、沖縄戦の概況をはじめに、米須の村の方々の戦争体験、戦争概況を掲載して、戦争体験の風化減少を少しでも、食い止

めたいものである。

ここには個人の経験の範囲を超えた普遍的な意味の世界が生み出され、世代的なつながりの中での役割意識として再構成されている。松本大は仙台の公民館で試みた高齢者のライフヒストリーのワークショップでの経験をもとに、語りにはその経験を語り伝えようとして想定する集団が存在すると指摘している[51]。これらの言説が、共通して若者や子供への責任を挙げて自らの行為を意味づけているのは、まさに語りの本質的な作用を指している。

またこうした集合的な意識の背景には、「戦争のために多くの仲間を失い乍等も生き残った我らは…、いかなる戦争にも絶対反対し戦争勢力には体を張って闘うことを近い筆を置く」(『前川誌』)や、「事が大きくなってしまってから『オレ』は反戦だと言ってもどうしようもない。何事も小さいうちに芽を摘まないとどうにもなるものではない」(『識名誌』)のような、明確な反戦意識が生起していることを記憶されるべきだろう。

このような事実は、先に述べた字誌がもつ社会的なダイナミズムを表すということができるだろう。

5．小結――字誌づくりの社会教育的意味

以上、字誌に収録される戦争体験記録の意味世界の解明を通して、字誌づくりの社会的なダイナミズムについて検討してきた。ここでの検討を通して明らかになったのは、沖縄戦の体験を記録する取組みがさまざま存在する中で、字誌が有する特有かつ重要な意味である。それは字誌であるがゆえに許される「何でもあり」の世界がもつ、語りの豊饒さに由るものであった。語り口の回りくどさや表現の稚拙さなどの、県史や市史などの公的な記録集では省かれる不要な要素ないしはある種の夾雑物の存在が、その豊饒さを生む要因であった。

沖縄の小集落の日常的実践がもつ社会教育的意味の解明という、本論文の課題との関係でいえば、沖縄戦の経験記録の分析および解釈から明らかになる上記の事実が示すのは、自らの人生の意味の発見およびその共有という形での、学校型とは異なる学びの過程がそこに存在するということである。本稿では、「共同のライフヒストリー」という方法論をもちこむことによって、体験記録のなかに語りの過程を見出し、証言の背景にある価値の移動や判断の創出のプロセスを見出そうと試みた。いま述べた、語り口の回りくどさや表現の稚拙さなどの、ある種の夾雑物の存在とは、そのような振り返りや思考の過程を示す道標であり、研究する者はそれを手がかりに、意味が語り手の中で発見されるプロセスを尋ねることができた。

ここでの作業はまた、沖縄の小集落で繰り返される住民の日常的な生活が、どのようにして社会全体の合意形成とつながるのかという、政治社会的な側面でも一定の意味をもつ。本稿で個人の内面で展開する省察が社会や歴史という、個人を超えた普遍の世界と結び付いていることが明らかになったはずである。この社会性は従来からの、社会運動や階級などの社会の大きな枠組を前提にした活動主体の形成論とは、趣を異にする。この場合には客観的な知識の伝達や獲得が不可欠な要素になるのに対して、ここでの場合はそうした外在的な要素の存在によらずして、歴史と社会の主体が形成される筋道およびその可能性が示されている。これは沖縄の小集落における日常的実践がもつ、社会的ダイナミズムというべき事柄である。

しかしながら、このような小集落の日常的実践のダイナミズムは、字誌づくりという文字を媒介させる世界に限定されていることによって、自ずと限界をもっていることも事実である。この点では、集落の日常的実践の中には、字誌のように文字によらない実践が多数存在する。それらの持つ社会教育的意味については、すでに公表してきた筆者の他の論文に任せたい[52]。

注

1）小林文人・平良研一編『民衆と社会教育――戦後沖縄社会教育研究』(エイデル研究所　1988)。

2）「集落」は客観的な生活単位を示す用語として使用し、「シマ」は集落での住民の生活がもつ内的な意味世界を表す用語として使用する。また行政の単位を表す「区」という表現も、必要に応じて使用する。

3）中村誠司「沖縄における地域史および字誌づくりの現在と可能性」(東京・沖縄・東アジア社会教育研究会『東アジア社会教育研究』　No.6　2001)

4）「区総会での決定」「編集委員会の発足」「予備調査」「構成」「分担」「資料調査・収集」「原稿執筆」「原稿の検討」「編集」「印刷」「出版」の過程が紹介されている。(名護市教育委員会『字誌づくり入門』1989)。

5）中村誠司「沖縄の字誌作り」(新妻二男・内田司編『都市・農村関係の地域社会論』創風社2000　97頁)。島袋正敏「沖縄の集落自治と集落（字）公民館」(小林文人編『これからの公民館』国土社　1999　94頁)。

6）H. ブルーマー『シンボリック相互作用論』後藤将之訳 勁草書房 1991、アラン・クロン『入門エスノメソドロジー』(山田富秋・水川善文訳）せりか書房1996。

7）Michel de Certeau, Pratiques quotidiennes., G. Poujol et R. Labourie (sous la direction de), *les cultures populaires*. Privat, 1979, ミッシェル・ド・セルトー『日常的実践のポエティーク』(山田登世子訳　国文社　1987)。

8）田辺繁治「日常的実践のエスノグラフィー」(田辺繁治／松田素二『日常的実践のエスノグラフィー』世界思想社　2002）3頁。

9）S.B. メリアム『質的研究入門』(堀薫夫・久保真人・成島美弥訳）ミネルバ書房　2004

10）クロン . A『入門エスノメソドロジー』(山田富秋・水川善文訳 せりか書房）1996　176頁。

11）G. Pineau / Marie Michèle, *Produire sa vie*. (Edilig/Edition Saint-Martin, Paris et Montréal. 1983) の後半部分は、マリーの語りとピノーによるその分析および解釈に充てられている。

12）M-J.Coulon et J-L. Le Grand, *Histoires de vie collective et éducation populaire*, L'Harmattan, 2000, pp.138-139.

13）Jacque André, Marie-Jo Coulon, Claud Naud, *A Grand-*

Lieu, un village de pêcheurs, Passay se raconte., SÏIOË, Nantes, 2000.

14) Association des habitants d'Orléans La Source, *Histoires et Mémoires du quartier de La Source.*

15) Le Grand. J-L, Repère théoriques et éthiques en histoires de vie collective. dans *Histoires de vie collective et éducation populaire.* op,cit., p.129.

16) ケン・プラマー『生活記録の社会学』(1991)、L.L・ラングネス、G. フランク『ライフ・ヒストリー研究入門』(1993)、中野卓『口述のライフヒストリー』(1977)、中野卓・桜井厚『ライフ・ヒストリーの社会学』(1995)、小林多寿子『語られる「人生」』(1997)、マクナミー、ガーゲン『ナラティヴ・セラピー』(1997)、山田ようこ『人生を物語る』(2000)、桜井厚『インタビューの社会学』(2002)、野口裕二『ナラティヴの臨床社会学』(2005)、山田富秋『ライフヒストリーの社会学』(2005)、グッドマン、サイクス『ライフヒストリーの教育学』(2006)、森岡正芳『ナラティヴと心理療法』など。

17) Bénédicte de Maumigny-Garban, Trois moments historiques et trois dimensions de la démarche autobiographique, dans J-Y Robin, B de Maumigny-Garban et Michel Soëtard, Le Récit biographique, tome 1, L'Harmattan, 2004.

18) G. Pineau / Marie Michèle, *Produire sa vie.* op,cit., p.124

19) 山田ようこ『人生を物語る』ミネルバ書房　2000　14～16頁。

20) Alex Lainé, *Faire de sa vie une histoire*, DESCLÉE DE BROUZER, 1998, pp.141-144

21) 坂部恵『かたり』弘文堂　1990　35頁。

22) 拙稿「字誌づくりに関するエスノグラフィー的研究」(『東アジア社会教育研究』第14号　2009)。

23) ラニ＝ベル「個別性と集団性、東洋と西洋の間」(『沖縄の字(集落)公民館研究(第2集)』)同上　90頁。

24) Martine Lani-Bayle, *Taire et transmettre*, Chronique sociale, 2006, p.83。

25) 拙稿「成人学習論の伝記的アプローチ」(『東アジア社会教育研究』第12号　2007)。

26) 嶋津与志『沖縄戦を考える』ひるぎ社1983　100～101頁。

27) 大城将保「沖縄戦記録の問題点」(『近代沖縄の歴史と民衆』沖縄歴史研究会編)至言社　1977　293頁。のちに改定されて嶋津与志『沖縄戦を考える』前出109頁。

28) 林博史『沖縄戦と民衆』大月書店　2001。

29) 嶋津与志『沖縄戦を考える』同上　110頁。

30) 大城将保「沖縄戦記録の問題点」前出。

31) 嶋津与志『沖縄戦を考える』同上　126頁。

32) 嶋津与志『沖縄戦を考える』前出　242～247。

33) 沖縄県教職員組合那覇支部・沖縄戦を考える会『沖縄戦と平和教育』沖縄県教職員組合那覇支部　1978。これらの項目の執筆者は、嶋津与志。

34) 屋嘉比收「記録による記憶の浮上『島クトゥバで語る戦世』」琉球弧を記録する会『島クトゥバで語る戦世』2003　24頁。

35) インタビュー「言葉と映像」『島クトゥバで語る戦世』同上31頁。

36) 岡真理『記憶／物語』岩波書店　2000　77頁。

37) 坂部恵『かたり』前出45頁。

38) 名護市辺野古区事務所『邊野古誌』第13章「住民と戦争」1998　525～574頁。

39) 仲田晃子「ただ聞く耳の実践」比嘉豊光写真集2007　『わった～島クトゥバで語る戦世』ゆめあ～る　2007　238頁。

40) 読谷村字座区『残波の里――字座誌』1974

41) 名護市伊差川誌編集委員会『伊差川誌』1991　289頁。

42) 北中城村字瑞慶覧記念事業推進委員会『瑞慶覧誌』1993　130頁。

43) 読谷村字座区『残波の里――字座誌』352～354頁。

44) 森岡正芳『ナラティヴと心理療法』金剛出版2008、シーラ・マクナミー、ケネス・J・ガーゲン『ナラティヴ・セラピー』(野口裕二・野村直樹訳)金剛出版1997、Christine Delory-Monberger & Christophe Niziadomsky, *Vivre/ Survivre*, Téraèdre, 2009.

45) 玉城村前川誌編集委員会『前川誌』432頁。

46) 南風原町大名区『大名誌』200頁。

47) 那覇市識名区『識名誌』243～244頁。

48) 嘉手納町屋良誌編集委員会『屋良誌』615頁。

49) 沖縄市古謝誌編集委員会『古謝誌』337頁。

50) 糸満市米須字誌編集委員会『米須誌』440頁。

51) 神戸大学ヒューマンコミュニティセンター『人はどのように自分を変えるのか』(ESD 研究国際シンポジウム資料)2010。

52) さらに深い層については、次の論文を参照してほしい。拙稿「沖縄の村踊りと青年」(『東アジア社会教育研究』第13号2009)、M.Suemoto, Evénements de la vie et particularité du processus de formation au Japon、Martine Lany-Bayle et Marie-Anne Mallet, *Evénements et formation de la personne. Tome3*, L'Harmattan 2010, pp. 195-213. M. Suemoto, Culture traditionnelle et jeune génération à Okinawa. Martine Lany-Bayle et Marie-Anne Mallet, *Evénements et formation de la personne. Tome 2*, L'Harmattan, Paris, 2006. 11. pp. 103-126, M. Suemoto, Des événements de la vie comme un cours d'histoire sociale. Martine Lany-Bayle et Marie-Anne Mallet, *Evénements et formation de la personne. Tome 1*, L'Harmattan, Paris, 2006. 6. pp.59-70,